



日本大学三島高等学校

同窓会会報

第 4 号

昭和50年2月25日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会 発行

心は小に 志は大なるべし

会長 玉津徳太郎



高度成長は昭和二十年以来、日本民族の最高目標であった。この民族的志向性は産業経済に文化生活にと多面的に着々と進められ、今日見られるような発展を実現し、世界の注目を集めることになった。しかし、いまや、わが国の高度成長を可能にした諸条件は一変したといわれる。それは石油ショックといわれたエネルギー資源問題をはじめ、国際的収支のアンバランス、国内的には産業公害、自然環境破壊、インフレ・物価高騰など直接的に国民生活を刺激する諸問題が一時に表面化し、不安と動揺

の世相が物語るところである。この歴史的転換期に当面して、わが国民のあり方はいかにあるべきか、これは年頭に現われた各界有識者の所感にも明らかにみられるところである。その共通点を私なりにまとめると、まず第一は戦後わが国が第一目標として努力してきた経済の高度成長のあり方を静かに反省し、物量の行動のゆき過ぎを是正し、ほんとうの幸せは何かを考え直し再出発すべき時である。また、個人生活においては物より精神の豊かさを求め、ムダを省いて物をよりよく活用するということから真の創造性を生かし文化国民としての価値を考える時である。さらに、何事も世界各国との関係に立たなければ解決されない時代であるから、国際的マナを身につけ、どこまでも平和主義に徹し、相互理解と協力の態度で世界的交流を重視すべき時代と

なつた。要するに、個人的にはムダを省いた創造性、社会的には公正と福祉、国際的には友愛と連帯、というように物量から精神に価値転換をはかり、福祉国家、文化国家、平和主義、を目標にして出発した三十年前の初心にかえって再出発すべきことが強く呼びかけられた。

換言すれば、われわれの日常生活における物的豊かさを反省し、何事についても個人主義と社会的友愛、公正と連帯の関係を考え、目的と方法、自己と友人、自己目的と集団目的など日常行動に細心の注意と効果的努力を注ぎ、この連続に

よって真の自由と平等、社会的不均衡の是正、国際平和という理想実現に一步一步進むべきだということである。その真髓はまさに「心は小に、志は大なるべし」ということにある。この立場から、わが同窓会の動きをみると、卒直に言って、新時代への歩みを着実に進めている青年集団であるということができよう。その第一は地域毎に十支部が作られ、最寄りの同窓生が生業の余暇を活用して例会をもち、意見交換、懇談の機会を通して、各個の歩みを反省し相互に扶け合って、自己のあり方を探究していること。第二は各支部代表が年度毎に総合をもって、事業計画を作り、これによって同窓会の活動を統括して

いることである。これは母校を中心とする公的集団の特性を示すものとして評価すべきものである。さらに定期的に斯界の名士を招へいして、文化講演や時局講演の催しを開き、新入会員と共に時代的感覚の研修につとめていること。これらは、いずれも陥入りがちな個我を奮起させ、社会的主体性の向上を促がすものであり、新しい時代への価値転換に資するものと思われる。価値転換への道はあくまでも、日常生活における細心の注意と努力から始まり次第に大成へと進むことにある。同窓生の一人ひとりが、新時代に着実に大成への道を進まれることを期待して止まない。



母校の指標「思索の像」

仲間との

つながりを求めて

幹事長

高田 菊平



昭和五十年という年はなんと難かしい年になった。一昨年末よりはじまった石油ショックによる世界の経済状態は、今日の今となつても、その後遺症は消えず、ますますその複雑、困難さはきわめつつある。そして高度成長の時代から、もはや低成長の時代へと入つたといわれている。そのような社会の状態にあつても活躍されておられる同窓会員の皆様には御同慶のいたりである。

このような困難きわまりない時こそ、——少し観点をかえてみて——ここに同窓会というひとつの媒体が存在していることを改めて考えてみたかどうか。

我々は個々の生活の中に、また個々の会社の中にあつて、えてしてこじんまりとやや隔離された、こじんまりとまとまってしまふ傾向が、むしろこのような世相にはよ

り一層その傾向があるようだ。しかし現在は、それを打破して、小さなまとまりは活動の範囲を小さくするだけで、より大きな発展は望めないものであらう。企業活動においても日常生活においてもそれはいえるものと思う。

我々同窓会員、あえて仲間と呼ぶしてもらうが、我々仲間は既に数多くの同胞をこの世におくりだし多方面にわたつて輝かしい活躍をしておられる。その仲間とのつながりを広く求めることは我々自身の大きななかになりうるものと信じている。その媒体として同窓会をもっと多く活用してもらいたいし、またそのつながりの場をつくるのが私の役目でもあると考えている。

昨年四月、初めて同窓会の事業として、講演会を開催することができ成功裡に終ることができた。これも仲間同志のつながりからであり、その一つの成果に他ならないのである。

これから先、二十年三十年と歴史をつみかさねてゆく中で、常に我々の仲間としての媒体、同窓会を発展させてゆくために努力をつづけたいものである。

支部だより

—支部の結束を望み— 一年を振り返る！

沼津支部

支部長 高木弘之

卒業生のみなさん、御卒業おめでとうございます。いかがでしたか？あなたの三年間は？十年余の前に巣立った私達はもう三十才がすぎどうにか実社会にて一人前の人として働くことができるようになりました。そして更にその中核として働くことが出来るよう懸命の努力を重ねている毎日です。こうしたなかで思い出されることは高校時代の先生や友人そしてクラブの事とつきることはありません。そして今では社会人としての立場から同窓会の価値を見いだすこともでき人間関係を広げるよう務めるほどであり、たつた一つ同じ学校を卒業したという共通点があるなにも対人関係をなごやかにするものかと驚くほどです。沼津といえは私の頃もそうでしたが、最近には特に多勢の方が母校に通うようであり、このことから沼津支部も三島支部同様に母校の地元として存在すると考えている次第である。加えて喜ばしいことは母校が年々発展しているということであり、街での評価も高くわれわれ沼津支部会員二千名弱の誇りともなっております。

ともあれ母校同様支部としても発展している貴方にとって、一役となれる支部実現のため努力を重ねる所存であり、併せて新入会員の皆様にも協力を願うところです。

富士宮支部

支部長 小林修簡

活動状況

昭和四十九年度におきまして当支部は支部長を始めとして関係者一同頑張っております。当初新人同窓生の歓迎を始めとしてまして春期バス旅行、夏期における富士五湖キャンプのつどい、納涼大会、秋期温泉旅行、冬期スキー教室を富士山でと各種、催しも企画致しましたが計画どおれもございました。これも、同窓生の結束いかにかつておりますので通知あり次第御一報下されたくお願い申し上げます。

昭和五十年度におかれましても計画致し新入生歓迎を始めとしてしまして御通知申し上げたく思っておりますのでその節は御参集の程よろしくおねがい申し上げます。また、同窓生の方々と、これはと思われる企画及び、報告事項がありましたら支部長まで御連絡下されたくここにお願い申し上げます。母校発展のために、同窓の職

員の方々を始め一同、一致協力のもとに頑張ろうではありませんか。日本大学三島高等学校もあと少しで二十年を迎えます。各クラブにおかれましては活やくしてあります。皆様も一度母校をたずね、近況を自分の目でたしかめるのも一興かと存じます。不況の世、結束することによって何か得られまして幸いに存じます。皆様の御健康、御多幸をお祈り報告を終わらせていただきます。

小田原支部

支部長 川口功一

我々、三期生も今年で、三島高校卒業以来十二年を数えるようになり、同期生も十数年前の三島高校では、小田原よりの通学は、わずか三名であった。それ故に一期から五期卒業生位までは、各人の意志の交流も深く、十数年を経た今日でも、種々の出来事に於いても、ミーティングを持つ機会が多い。

しかし、今日の様に卒業生も年々増加してくると、序々に同窓生としての交流も薄くなる様に感じられる。この同窓生としての交流を目的として各同窓会支部も活躍していると思われる。

当、小田原支部は、残念なことに昨年は、何の行事も行なうことが出来なかったが昭和五十年の今年こそは、住所録の完成と、それに伴った行事と、同窓会員への住所録の配布を行なう事を目標として小田原支部は、今日の不況の世界に希望を持って生活していきたい。

三島支部

支部長 杉本博司

卒業生の皆さん、おめでとうございます。三島支部の会員心よりお祝い申し上げます。いま皆さんの胸中にはさまざまな思いが、往き来していることでしょう。私達が十五年前に巣立っていった時もそうでありましたが、皆さんの胸の中には、我、高校時代に悔いなし、という喜びであると思います。今、所期の目的を果せず、思い悩んでいる人もあるかと思いますが、そこで挫折してしまうのが、諸君の業ではありません。

失敗しても、消極的にはならず失敗するならば積極的に、強靱な肉体と精神がこの三年間に桜の園で培われたはずで、これからの人生傷つく事は多々あります。何ものをも恐れずに幾度か挫折しながら、目的の前に無念の涙をのみ、傷ついた自分自身の為に一人乾杯することが出来るのは青春の特権です。明日からの一日一日をそれぞれ立場は違いますがしっかりと歩いていって下さい。そして、もし苦しいことがあったら旧友と語ることです。旧友との語らいから出発し、先輩へ後輩へと輪を広げていく。苦しいことばかりでなし、楽しいことや、うれしいことを仲間と交換する。そして共通の目的をもって精神的なつながりより出発し輪を太くしながら地域社会の一員として地域ひいては社会へと貢献していく、そこに同窓会の使命があります。多に利用して下さい。

母校の地元の支部として昨年四

月にはTBS ニュースコープ担当の入江徳郎先生を招き講演会の開催には三島支部会員は多に活動した。そして夏には沼津支部に便乗し夜の駿河港を龍宮丸を借りきり、家族交換会を行なった。船上では校歌と応援歌を合唱し、楽しいひとときを過ごした。

富士支部

支部長 西村雅幸

昭和四十九年四月四日に支部総会を開催し、昭和四十八年度の会計報告、事業報告等の承認を得、続いて昭和四十九年度の予算事業計画等について種々検討しました。

そのうちで会員及びその家族が参加できる手短のものという事で綱引きに決まりました。

昭和四十九年五月十九日当日の綱引き参加者は幹事長他の支部長会員及びその家族等の総数三十名



..... 田子の浦湾での綱引き

清水支部

支部長 齊藤康行

清水支部といっても他支部と特にかわった様子ではなく同様に行事や会合をもつて日常の活動としている訳ですが、三島、清水を毎日電車で行く、この時間は静岡の連中とともに貴重なものであったし、友との語らいの絶好の機会であったように思います。登下校時によつて生まれた友情は地域的感覚もつたつて他に劣ることのない友愛である。そしてそれが今をもつて続き思い出となつて花を咲かせ絆となつていく。これからの清水支部の会員は地元地区に比べてその数は少なく四〇〇名余りですが、少なくともそれだけ「まとまり」という点でその活動が期待できるという訳であるから、この機会をもつて来年度は活発に事を起し他支部以上に名簿の作成から親睦会等の行事を実行するよう決意しておりますので、その折には是非参加下さるようお願いするとともに、本会が会員それぞれの発展に何らかの形で役立てば幸いです。

静岡支部

支部長 長島興嗣

支部だよりの原稿依頼がくると、もう一年が過ぎてしまったのかと.....。この一年は特に感じるのがある。一体静岡支部として、この一年の活動をふりかえつて何をやってきたのかと、反省する材料がいっぱいであった。八月に、支部の第三回の集まりを、やったのであるが、予定していた。人数が集

まらず、あせってしまったのである。ただ救われたのは三島から、幹事長と、三人の先生方が、来てくれたこと.....。(ちょうどこの日は安倍川の花火大会で)

われわれ幹事のいたるなさを、痛切に感じたのである。議題を変更して支部の人達との、話し合いになったのである。支部に対しての、考えや、要望などを含めながらやったのである。結論としては、一支部名簿の作成、二各期の連絡網を確かなものにするということであった。ほんとうに少人数ではあったが、有意義な支部会でした。

このようなことを大切に、育てあげ、少人数でもよいから、積極的に、活動しあい、時間をかけて支部をつくりあげるといふことで、散会したのである。



昭和五十年 度

新入同窓会員を

迎えて!!

|| 歓迎のことば ||

一年経るとともに新しい会員を迎えられる。これほど同窓会会員にとって心強いものはない。

社会での仲間づくりの基だからだ。

今日、ここに第十五期生の卒業を祝し、同窓会への入会を心より祝したいと思う。

我々同窓会員も然りであるが、新入会員には、これからの社会、時代を広くみつめ、決して自分一人に閉じ込めず、一人の人生を大きく生かす為に、仲間の結束を大事にして欲しいと思う。

母校の発展を礎として、そこから巣立ちゆく者がともに相たづさえて、汝の希望、汝の夢を一段と高く志向し、実を結ばせてほしいものである。心より第十五期生の入会を、歓迎申し上げます。

新入会員代表挨拶

稻生 一夫

本校同窓会も、聞くところによりますと昭和三十六年に発足以来今年で十五年の歳月を数え、円滑な運営がなされているとの事です。ここに新たに入会させていただいた以上、会員の一人として頑張っていく次第です。

同じ学窓に巣立った者が、会を通じて親睦を図り高校時代を振り返り語り会える事は社会生活を有意義なものとする物と思います。

まして我母校は他校と違い同窓生は県内のみならず広範囲に行き渡っているとの事です。同窓会のもつ意義は深いものと言えるでしょう。その意味からしても、大いに参加したいと思えます。学

園を巣立ってしまふととなく疎遠がちになつてしまふものであります。友情の絆を深めるにはもつてこいの活動の場ではないでしょうか。そして、お互いの人間的成長を見比べる楽しみもありましょう。

我母校が、会を盛り上げて、社会情勢に逆行して益々発展興隆に寄与出来ん事は、私達同窓生の母校の愛情の示しでもあり、お世話になった学校や諸先生方に対してささやかな恩返しでもあると思います。会を通じて、母校も同窓生も飛躍して行きたいと思ひますので、先輩方々今後共宜しくお願い申し上げます。

|| 角田先生御見舞 ||

実った

恩師への思い

一昨年来より第一期生二期生を中心に続けてまいりました母校初代校長、角田陽六先生の病氣御見舞についてこの会報をもって御報告致します。

一昨年、私達母校周辺に住む卒業生の耳に角田先生の健康がすぐれないとする報が入り、教えを受けた者の先生への感謝と健康回復を願ってカンパ活動をはじめました。そしてこの主旨を広く伝えるべく幹事会にも申し述べ同窓会全体のこととして取り上げていただき、次に示すように大勢の皆様から御協力をいただき発起人としても大変うれしく思っております。

総員七十四名より九十七口（内訳一期生三十七名より五十九口、二期生三十七名より三十八口）の御協力をいただき金額も三十万円にも達し、早速先生の御宅を訪れ皆様の意を伝えるとともに一日も早く健康を回復されますようにと言葉を残し、このカンパを終了した次第である。

とかく物質文化や映像文化ともよばれる昨今にあつて忘れられがちな師弟愛の表現として私達も心よく思い人間の本来を見た気さえもいたします。ともあれどんなに時代が替つても尽きない美しい人間関係を保ちたいものであります。

発起人

一期 高田菊平

二期 渡辺博夫

同窓生のプロフィール

＝ 国内・外を問わず
同窓生は活躍する ＝

バスケット一筋に

尾鷲邦男（八期生）

時にはチームをリードし、時には自分を抑え、着実に自己を築きあげ全日本のスタープレーヤーとして成長してきた人である。

彼は、戸田中時代より本校を志し、高校三年で長崎国体決勝戦においてその頑張り屋をいかになく發揮して母校を優勝に導き、つづく日大時代は一年生よりレギュラーとなり、四十七年度関東学生生の優秀選手賞を獲得した。

四十八年度は、膝の故障にもめげず日大バスケット部キャプテンとしてインカレ優勝とともに全日本学生最優秀選手賞を手中に収めたのである。その後実業団でもトップクラスの日本鉱業に入社し、持前のねばり強さが高く買われ、

海外技術員として活躍

高橋英晴（八期生）

日々バスケットボール界における尾鷲君の今後の健闘を祈りたい。

「日大三島の学園にも足が遠くなつてしまつたが、土木科出身であることに誇りをもち、それと同時に我が社、我が土木の仕事に誇りをもって邁進して来た。」と言

現在、高橋君は東亜建設工業の

海外事業部の工事課に席を置き、海外工事の積算及び見積りに毎日費やしている。国内では考えられないような大規模な工事（金額で言うところは一工事で数百億円程）が石油産出国や後進国を中心に発注されている。

高橋君は、学校時代から外国に行きたいという夢、憧れを持っていたため、会社の上司に「海外工事の監督及び技術指導に行つてくれ」と言われた時、一にも二にもなくO・Kしたそうだ。

そんな高橋君は、英語の特訓を始めた。会社でも仕事中には英文の図面や書類だそうだ。「学校時代のおつりを今ももらった感じだ。」と言いながらも、現在、海外技術員として一生懸命頑張っている同窓仲間なのである。

十支部合同事業

【講演会】

入江徳郎氏を招き

盛大に催される

「これからの政治と経済」と題する講演会が、去る四月十四日、日本大学八号館講堂において開催された。

総会において提起され計画されたこの講演会（支部共同事業の一環）は、三島商工会議所・日大校友会三島支部の後援も得て、実現の運びとなった。当日は聴講四百五十人という盛況であった。新時代に適応する時代感覚を養うという会長の意図のもとに、

ニュースキャスターの入江徳郎先生の時局講話が企画されたわけでもあるのだが、ユーモアを折りこみでの話術によって大局に立つ政治経済の過去から現在、そして未来への見通しなど多角放奔に弁を論じられ、まことに聴衆をひきつけるものがあつた。時代変動の折柄、皆得るところ大であつたようである。同窓会発展の礎として大いに評価したいものである。



同窓生を前に熱が入る

【ゴルフ講習会】

ここ数年来のブームは転身止むところなく次から次への登場である。ボーリング、釣り、スキーとあるものは水泡のごとく消え去つてゆく、そのなかでゴルフはその生命も長く必要とする技術も一朝一夕のことではなさそうである。金持階級から普及したものだからかな？とも思うがともあれ大変なブームであり自然をも食うほどである。

そして同窓会もいつもの集會や合會の他に會員が気軽にして共通する趣味をもつて相互の親睦を図り合の発展に役立てようと十月二十六(日)に三島でゴルフ講習会を行なうよう決定。第一回目とあつて本格的ではないが三島富士ビレッジ練習場の一時間、そしてショートコースを二周して楽しんだという程度。

当日は朝方強い雨のため會員の出足は悪く三島、沼津、田方の三支部より十五名の参加で終つてしまつた。しかし一応の楽しみは味えたような気もする。そして今度はコースでの本格的なものを企画することを約束し散會。次會は四月を予定しておりますのでその折御参加下さい。

【納涼船】

真春の行楽といえば海であることが第一であろう。また海が私達に与える感傷もすてがたい。同窓会の行事としての海は感傷である訳はないのだが、所をかえ雰圍氣をかえ同胞と語り楽しむことも形

骸化の傾向にある組織にあつては必要とされるものである。ここ二三年の同窓会の活動のなかに夏期行事が必ず計画され四十九年度は納涼船と決まりその中心を沼津、三島支部が担当することとなり駿河湾上での一時を家族的雰圍氣の中で過そうということになった。

七月二十八日沼津港より十八時、

昭和四十九年度

事業

一、総会

昭和四十九年四月十四日
日大三島八号館食堂

(出席四十六人)

- 1 幹事長・会長挨拶
- 2 四十八年度事業・会計報告
- 3 四十九年度事業・会計報告
- 4 その他

二、幹事会

第一回 三月二十四日

(じゅん)

春の講演会・総会の件

第二回 六月十五日(じゅん)

納涼船の件

第三回 十月(静岡)

忘年会・ゴルフ会の件

第四回 十二月七日(小川屋)

忘年会を兼ねる

三、その他

1 春の講演会

四月十四日(日)午後一時～三時
日本大学三島八号館

「入江徳郎」講師

「これからの政治と経済」

2 夏の納涼船

七月二十一日(日)午後五時

龍宮丸に乗船、海上を渡る風は心地よいほどに涼しかった。

当日は會員のみならず奥方や御子様も乗船とあつて三十余名なごやかであつた。御子様には花火を用意しての歓迎であり幼なき日の思い出となるのであろう。

今後はこうした家族そろつて参加できる行事を企画したいと思つております。

報告

沼津港より納涼

3 秋のゴルフ会

十月二十七日(日)午前十時
富士ビレッジゴルフ場

4 忘年会

十二月七日(出)
伊豆長岡小川屋旅館

5 各支部行事

田方支部 第四回総会

(三月勝珍軒)

富士支部 総会(四月)

富士支部 網ひき(五月十九日
日午前八時東田子の浦)

三島支部 総会(五月十九日
照明館)

静岡支部 総会(八月)

6 その他各支部、冬期、各クラス、各科の同窓会が開かれた。

本年度の最大事業は、入江徳郎氏の講演であつた。その他親睦を深める事業が本部を中心に各支部で行なわれた。今後も本部を中心として、楽しく會員が多数参加できるような事業を企画していきたいものである。

(二期 三田村 記)

母校だより

四月	式 業 始 学 入 式	十月	交通安全教室 スポーツテスト
五月	足 遠 研究交通安全教室	十一月	日大付属 高等学校 統一テスト (3年)
六月	保護者懇談会	十二月	修学旅行 終了式 保護者懇談会 冬休み (3年)
七月	式 了 終 夏 休 み	一月	冬休み 始業式 保護者懇談会 (1・2年)
八月	夏休み 夏期講習 教職員研修会	二月	卒業生送別会 高校入試
九月	式 業 始 桜 陵 祭	三月	卒 業 式 修 了 式

昭和四十九年四月から昭和五十年三月までの学校行事は右の通りであるが、そのうち主なものについて説明を加えてみたい。

四月には千九十余名の胸に希望を抱いた新入生を迎え、厳肅な雰囲気の中に入学式が挙行された。五月と十月には免許証取得者を対象に交通安全教室を開き、激増する事故や違反の撲滅、安全運転の心構えなどを再確認した。

九月には年間最大行事である桜陵祭が二十一日～二十三日までの三日間、統一テーマに「自覚・連帯・創造」を掲げ、全校生徒および教職員がこれに参画した。第一日目は秋晴れの好天に恵まれ体育大会と開会式が行なわれた。第二日目は学級発表会、一年生は合唱コンクールを、二年生は仮装行列を雨天のため翌日に、多数の来場者の中行ない拍手をあげた。第三日目は例年通り三年生の農兵

節踊りが、また、前日に引き続き学術クラブの展示会、文化団体の公演会が行なわれ、本年度の統一テーマの目的を十分に達成することができた。

十一月には日大付属高等学校統一試験(三年生)が行なわれ、昨年を上まわる良い成績をおさめたので進学に明るい見通しをもつことができた。

十二月には国鉄のストの影響を受けた為、例年より遅く二年生が七泊八日の日程で九州一周の修学旅行に出發した。「生徒の集団における自治意識を高め、広く社会的視野を広める」という目的のもとに数多くの体験を得て参加生徒全員無事帰着することができた。なお、五月と十月には研究授業が行われ、学習指導の方法や学力向上について先生方の活発な議論がなされた。今後の本校の発展が大いに期待される。

恩 師

「若さ」と 「情熱」を

大田恵久先生

私が教師になった頃、教室の前のドアを開けて授業を行うのが常であった。前校長の角田先生が、私達の教授法と生徒諸君の学習状態を観察され、私達にアドバイスを下さるためであった。教師として少し慣れて来た頃であつたと思うが、一期生の女子(当時二年生)の英文法(不定詞の章)に若さと情熱をぶつけて、無我夢中で板書した例文を説明していた教壇の左の端から一歩足を踏み下した瞬間である。側によつて観察のため入つて来られていた校長先生に全々気づかず、どしんとぶつかり、足を踏んずけてしまったのである。「失礼しました」と驚ろきと恥しさをもつてお詫びをした。クラスにどつと笑いが起つた。

「笑つてはいけないよ!」笑つてはいけないよ!の校長先生の声に、クラスの諸君は一生懸命含み笑いをもつてそれに耐えていた。校長先生が退室されたあとで、私は、恥しさを忘れてクラスに、恥しさを忘れて笑う。直した一大失敗を思い出す。このような失敗が他にいくつがあるか。

つたが、常に「若さ」と「情熱」でこれらの失敗をカバーして来たように思う。「若さ」と「情熱」こそ「進歩」するための車の両輪だと思ふ。家庭にあつては家族にかける情熱を、職場にあつては仕事にかける情熱を常に失わず、前進に前進を重ねていってみたいと思う。今もなお、一期生の女子の同窓会には私の失敗談を種に、続けられていくと聞いている。もし私のいくつかの失敗が同窓の強い絆を結んでいるとするならこれも無駄ではなかつたと思つていく次第である。

私の想い出

花野井先生

月日が過ぎ去るのは「光陰矢のごとし」の喩えのように、はやいものであります。初めて教壇に立つてから今日まで、あの顔、この顔と私の心に焼き付いた若者の顔は両手を幾度となく折り返して数えてみてもたりなくなつた。

もう一度、成長した顔の中に、昔のおもかげをみた、と思うことがある。ときどき、私の願いをかなえてくれるかのように電話がかかってくることもあるし、会いに来てくれる顔もある。昔の若い顔にりっぱになつた現在の顔を重ねて、その中に青春の想い出が帰ってくる。

教室で、拳をふりながら、一生懸命に頑張つた日々は忘れることの出来ない私の青春でもあつた。学校の裏山に真鶴岬に、伊豆の島々に、富士山に、自然を友として一緒に歩いたあの顔は、私の人生の一頁一頁に書き残されている。

私は幸せにも十年以上も生物部の顧問を引き受けて、現在もやっているが、この十年間の時間の中に想い出は濃縮されている。この想い出は、少い紙面では表わすことは出来ないが今日の自分をつくり上げた十年間であつたと思います。

高校は昔も今も、日々成長を続け、今日では教育内容はすばらしく充実している。これは、ここで学んだ若者のあの顔がこの顔が築き上げた良い伝統だと思ふ。

再び、君とあいまみえて、明日を語ることをたのしみにして筆を置きます。



海外視察

世界教育視察団に

参加して

田上晴美先生

昭和四十九年七月二十八日より八月二十二日までの二十六日間、日本私立中学高等学校連合会主催による世界教育視察団の一員として、北岡、白井、小池の各先生方とともに私もヨーロッパ・ソ連の教育事情視察の機会を与えられた。訪問九カ国の教育事情については、日程の関係でその一部を知ることとどまったが、それぞれの国の伝統、文化、風俗に触れることにより、得難い貴重な体験をしたことは、私たちの今後の教育活動に大いに役立つものと考えられる。また訪問九カ国において、それぞれに学校教育に力を入れている現状に接することができたのも、参考になることが多く、稔り豊かな視察であった。

訪問九カ国は、ギリシャ・オーストリア・スイス・イタリア・フランス・ノルウェー・西ドイツ・ソ連であるがそのなかで幼児教育等に特色のあるソ連の現状について簡単に述べてみたい。

ソ連の幼児教育は、多くの母親たちが職場に出て働くために、保育所や幼稚園の普及と内容の充実に非常に力を注いでいる。保育所は厚生省の管理で、工場、企業、農場などで開設され、三才までの

子供たちを受け入れている。幼稚園は三才から七才までの子供を受け入れ、多くは工場や企業体の設立であるが文部省の管理下に入っている。編成は一組二十五人で各組に教師(保母)二人が配置され、その他に校医、看護婦、事務員、炊事、用務員などの職員の配置は日本とはけた違いにゆつたりしており、一〇〇人の幼稚園に二十五人内外の職員がいる。

またソ連の子供たちは、学校の授業が終わった後でいろいろな施設を利用して課外活動をしている。十・十二才になると学校内にあるいろいろな種類のサークル活動を選んで入ることが出来る。サークルは学校またはピオネールの組織がつくり週二・三時間は何かの課外活動に参加することで自分の興味や才能を発見し、将来の職業を決定するのに役立っている。

またモスクワにある国民経済成果博覧会の教育館を訪問したが、学校教育の現状を示す統計や資料、実践活動や研究活動の成果をまとめた資料などが展示されており、責任者の説明を通して学校教育に力を入れていることが理解されたのであった。各地より休暇を利用してこの教育館に勉強に来る先生方も多く、現に幼児教育の展示資料を閲覧したり、アルバムに整理された資料を見たり、机に向ってノートをとったりしている女の先生方の熱心な姿に接して、そこにソ連の教師像の一端を見る思いがしたのである。

米・加の夏―寸描

久保田豊先生

第四回日大付属高校海外研修は、昨夏およそ二十日間程の旅程で行われました。コースは、第三回とはほぼ同様のハワイ・米本土西岸・カナダといったものでした。研修団は、生徒四十五名、先生七名、添乗員二名、看護婦一名計五十五名から構成され、本校からは十二名(男子四・女子八)が参加しました。

一行は、ハワイ諸島でも最大のハワイ島はカムエラのH・P・Aなる進学高校の寄宿舎で十日間を過ごしたのです。そこでの生活は、朝六時起床次いで柔軟体操で始まります。午前中は授業で、その学校の先生によるハワイ諸島の地誌ともいうべき「ハワイアーナ」と称す学科と英会話が主です。肩がこらぬ様にとの細かい配慮のもとで生徒諸君は、英語と格闘しながらも結構楽しく受講したことでした。午後は日によって違いますが、海水浴、排球、籠球、乗馬等に打興ずるのでした。ショッピング、スタッフの先生方のお宅訪問等を通して、人情の機微に洋の東西の差はないことを教えられたのでした。

米本土では、耳目に接するものが全てが驚異に満ちていました。砂漠の中によくもこんな大きな都市が形成されたものだと思わせる広大なロスアンジェルス、創設者の純な稚氣、真心が漲っているデイズニイランド、途方もない時間を刻みつけ言語に絶する景観を呈するグランドキャニオン、しつく

りしたセンスのあふれたサンフランシスコ、詩情ただようカナダは、バンクーバー……。

片言ながら外人と言葉を交しつつの生活を経験したという事実は、生徒諸君の一人一人の心の中に、何にも換えがたい資産となって残ったに違いありません。

生活面でのマナーも本校の諸君のそれが、俄然光っていました。皆様の次代を担う同窓生健在なりというところで。紙幅の都合で大巾に割愛せざるを得ず残念です。皆様の益々の御活躍をお祈りしつつ筆を置かせて頂きます。

静岡県私学協会の

海外研修に参加して

立光隼人先生

昨年の夏、静岡県私学協会の海外研修に参加する機会を与えられ、七月から八月にかけて、イタリア、スイス、ドイツ、オランダ、イギリス、フランスの六カ国を歴訪することができた。これらの国々は、いずれも自国の文化財や遺跡の保存について非常な熱意を示し、祖先の残した文化遺産に高い誇りをもつ態度が十分に窺われた。

特にフイレンツェでは、都市全体が、十五、十六世紀の面影を、よく現代に伝えている。こゝでは、家屋の新築、増改築については、古い形を保つことを原則として、市当局から厳しい統制が加えられていたし、ジュネーヴやアムステルダムは、旧市街と新市街とを明確に区分することによって、開発

と保存という問題をたくみに調和させていた。

私は、この研修で「中世」という時代について考えさせられた。

この時期はよく「暗黒時代」といわれ、そこに文化的発展を認めず停滞の時期と決めつける風があった。今後の旅行ではいろいろな教会で多くのステンド・グラスを見てきた。いわゆるロマネスク式教会は、窓は小さくその数もすくない。内部は非常にくさい、これは、思想の自由のない、教会に圧迫されていた人々の陰うつな心理状態を示しているといわれ、私自身もそう考えてきた、しかしこういう教会の内部へ入ってみると、そこにくらさはなくステンド・グラスを通して入る光だけがあつた。ガラスの製法それ自体未熟で、質もよくないから、光は複雑に屈折し、光は柔く、影と震動によって一段と神秘的な美しさを高めていた。パリでの自由行動の日私はシテ島の最高裁判所の中にあるサント・シャペルで、世界で最も美しいといわれるステランド・グラスをみた。

中世の人々の心の中には暗闇はなかった。そこには限りない光への探究心があつた。そこには信仰以外の何物もなかったのであらう。外からの物質的な光は、ステンド・グラスによって、魂にさしこむ神の輝きにかえられてしまっているのである。

中世という時代をもう一度考え直さなくてはならないと思ひながらオルリー空港から、東京行のジャンボへのりこんだ。

日本大学三島高等学校

同窓会規約

第一章 総則

- 第一条 本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。
- 第二条 本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。
- 第三条 本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもって正会員とし、現教職員および元教職員をもって特別会員とする。
- 第四条 本会は、母校建学の精神にのっとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することをもって目的とする。
- 第五条 本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。

- 一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事
- 二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加
- 三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第二章 機関

- 第六条 本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。
- 一、総会 二、幹事会 三、支部会 四、事務局
- 五、編集委員会

第一節 総会

- 第七条 総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。
- 但し、必要により各支部を代表する支部長会をもって、総会の決議にかえることができる。

- 第八条 総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。

- 第九条 総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に関し、会長が認めた時、又は会員多数の要求があった場合、会長は臨時に召集しなければならない。

第二節 幹事会

- 第十条 幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。
- 一、予算・決算に関する事。
- 二、事業計画に関する事。
- 三、会則の改廃に関する事。
- 四、その他、第五条によって必要と認めた事項。
- 幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半数の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があった場合は、臨時に幹事会を召集しなければならない。

- 第十二条 幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、庶務・会計二名、そ

第十三条

の他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役員ならびに常任幹事によって構成され、必要により幹事会にかえることができる。

第十四条

幹事会は本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。

第三節 支部会

- 第十五条 本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。

第四節 事務局

- 第十七条 事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める。
- 第十八条 事務局は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第五節 編集委員会

- 第十九条 編集委員会は幹事会に所屬し、原則として年度一回の会報発行、その他、本会運営上、必要な広報の任にあたる。
- 第二十条 編集委員会は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第三章 役員

- 第二十一条 本会は左記の役員を置く。
- 会長一名 幹事長一名 副幹事長二名 幹事、常任幹事、会計監査二名

- 第二十二条 会長には学校長を推戴する。会長は本会を統理する。
- 第二十三条 幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。
- 第二十四条 副幹事長は幹事会を補佐する。

- 第二十五条 幹事は各卒業学年の代表者が当たり、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。
- 第二十六条 常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり、地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。

- 第二十七条 会計監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。
- 第二十八条 各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。期は二年とする。但し、重任はさまたげない。

第四章 会計

- 第二十九条 本会の経費は会費ならびに寄附をもってこれに当てる。
- 第三十条 正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。

第五章 表彰・その他

- 第三十一条 本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。
- 第三十二条 本会に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認をえ、これを表彰することができる。
- 第三十三条 会員として名譽を毀損する行為があったときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができ、顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に應える。

第六章 附則

- 第三十四条 規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認を経て行なう。
- 第三十五条 制度施行 昭和三十六年三月十一日
- 第三十六条 改正施行 昭和四十七年四月一日

お知らせ

名簿について

○同窓会の派生的効果として最近多くの方からの御意見により、来年度より自家営業者の名簿を作成する計画でおります。

同窓生同志の営業上の交渉をもって自他共栄を目指すことを目的とするものです。自家営業の方、本部まで御一報下さい。

○母校卒業後、教職につかれていらっしゃる方、本部まで御一報下さい。進学状況その他の情報交換を行なう縦横の連絡をもつてより効果的な教育を実践する機会を得たいと思っております。

○各支部にて支部名簿作成の作業が進んでおります。貴方の住所を各支部長まで御連絡下さい。



編集後記

厳しい時代の流れの中で、同窓会員の絆が必要以上に必要な今日。各支部の着実な活動報告、健在ぶりがこの同窓会会報には詰まっております。

人と人とのつながりですから、難しい事だらけのはずで、だからなおこの会報を連結の証として、次年度の発展の力としてほしい。